

格助詞「に」の意味特性に関する覚書

菅井三実*

(平成11年9月16日受理)

0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語の格助詞「に」に認められる多様な用法を包括的に考察し、意味的な観点から「ニ格」の全体像を特徴づけることにある。まず、第1節で「ニ格」の機能的な修飾作用が基本的に自動詞構造の主格NPか他動詞構造の対格NPに限定されることを確認する。第2節で空間の「ニ格」が程度差をもちながらも(一体化)という概念によって一元化されることを示し、第3節で非空間次元においても同様の原理によって整理できることを見る。最後の第4節では、第3節までの議論を踏まえて「カラ格」と交替する「ニ格」について分析を加える。

1. ニ格の基本的修飾機能

この第1節では「ニ格」の意味役割を概観し、機能的な修飾関係を確認する。

与格の意味役割は極めて多様であって、実際、いくつの意味役割を設定するかに関してさえ見解は一致していない。^[1] 本稿では、体系的な整理を見越し、次のように都合14の用法を設定しておくことにする。

- | | |
|-----------------------------|-------|
| (1)(a) 建物全体が西に傾く。 | [方向] |
| (b) 先生が教室に <u>来た</u> 。 | [到着点] |
| (c) 壁に <u>ペンキを塗る</u> 。 | [密着点] |
| (d) コーヒーに <u>砂糖を入れる</u> 。 | [収斂先] |
| (e) 研究室に <u>学生がいる</u> 。 | [存在点] |
| (2)(a) 花子を <u>食事</u> に誘った。 | [目的] |
| (b) 子供に <u>英語</u> を教える。 | [伝達先] |
| (c) 絵の才能に <u>恵まれる</u> 。 | [要素] |
| (d) 太郎が <u>社会人</u> になった。 | [結果] |
| (e) 貴方にも一軒家が <u>持てます</u> 。 | [経験者] |
| (3)(a) 親友に <u>ノート</u> を借りる。 | [起点] |
| (b) 首相が <u>凶弾</u> に倒れた。 | [原因] |
| (c) 先生に論文を <u>批判</u> される。 | [動作者] |
| (d) 3時に <u>待ち合わせ</u> する。 | [時間] |

ここでは、便宜上3つのグループを作ったが、(1)(a)～(e)の5つは空間次元の用法であり、詳しくは第2節

で取り上げる。(2)(a)～(e)の5つは非空間次元の用法であり、(1)の5つと並行的に整理できるとの見通しをもって第3節で議論する。また、(3)(a)～(c)は奪格と交替する用法であり、(d)は時間次元を含む用法であるが、このうち、本稿では(3)(a)と(b)を第4節で取り上げることとし、紙幅の都合上、(3)(c)と(d)は割愛する。^[2]

では、実際「ニ格」は、どのような方法で特徴づけられるだろうか。具体的な意味内容については議論を第2節以降で行うこととし、ここでは自動詞構造・他動詞構造の順に機能的な修飾関係について検討する。^[3]

まず、自動詞構造における空間の「ニ格」がどの格成分に対して空間的領域を提供しているかを問えば、次の例が示すように、原理的に主格NPに限られる。

- (4)(a) 太郎がスーツ姿で公園に立っていた。
(b) 次郎がジープで山に登った。

(4)(a)で、下線部の「公園」が主格NPの[存在点]を指定していることは自明であろう。このとき「デ格」の「スーツ姿」も「公園」にあると言えないこともないだろうが「スーツ姿」が「公園」にあるというのは主格NPの「太郎」に付随していることの結果であって「公園」が積極的に「スーツ姿」の[存在点]を提供しているわけではない。また、(b)でも「ニ格」の「山」が[着点]として修飾するのは主格の「次郎」に限られる。「デ格」の「ジープ」が「山」にあるという含意は、(a)の場合と同様に、主格NPに付随した結果に過ぎない。^[4] このように、自動詞構造においては“空間的な「ニ格」が領域を提供する項は原理的に主格NPに限られる”と記述して問題ない。

他方、他動詞構造の場合、次の例から分かるように空間の「ニ格」が機能的に修飾するのは、主格NPではなく、対格NPに限られる。

- (5)(a) 太郎が望遠鏡で夜空に彗星を見た。
(b) 次郎が滑車で家具を2階に上げた。

(5)(a)において下線部の「夜空」が空間的位置を指定しているのは対格の「彗星」であって、主格の「太郎」や具格

* 兵庫教育大学第2部(言語系教育講座)

の「望遠鏡」が「夜空」に位置づけられるとは解釈できない。また、(b)において、下線部の「2階」は対格NP「家具」の[着点]であって、主格の「次郎」や具格の「荷車」に[着点]を提供しているわけではない。もし主格の「次郎」や具格の「滑車」が「2階」に到達しても、動詞「上げる」の意味から導かれるものではなく、偶発的な結果に過ぎない。かくて、他動詞構造において「ニ格」の修飾対象は対格NPに限られるという点が確認される。

ちなみに、他動詞構造において空間の「ニ格」が対格NPを修飾するという特質は、実は空間の「デ格」と弁別的な差異を示す。空間の「デ格」は、神尾(1980:61)、城田(1993:78)、竹沢(1995:73)などにおいて“文全体を修飾する”と記述されているが、この記述は正しくなく、次の例が示すように、実際「デ格」が修飾できるのは原理的に主格NPに限られる。

- (6)(a) 花子がベランダで星を眺めていた。
 (b) 池の辺で父が鯉にエサをやっていた。

(6)(a)において確実に下線部の「ベランダ」にいると解釈されるのは主格の「花子」に限られるのであって、対格の「星」は「ベランダ」にあるとは言い難い。また、(b)の例が示すように「ニ格」成分も場所的な「デ格」領域から外され得る。実際、下線部の「池の辺」にいるのは主格の「祖父」だけであって、与格の「鯉」は「池の辺」で泳ぐことはできないからである。かくして、空間の「デ格」が常に節全体を修飾するとは言えず、逆に言えば、他動詞構造において確実に空間の「デ格」が包含するのは原理的に主格成分に限られる。この点で、他動詞構造の「ニ格」が対格を包含することと示差的に異なることが分かるであろう。

ところで、厳密には格標示ではないものの、活用語尾に格助詞「に」と同一の形態をもつものに形容動詞の結果述語があり、機能的な修飾関係において「ニ格」と同様の振る舞いを示す。影山(1996)によれば、他動詞の場合、結果述語は対格を修飾するものと解釈される。

- (7)(a) 太郎が花瓶をバラバラに割った。
 (b) ?? 太郎が花瓶をクタクタに割った。

(7)(a)の下線部の結果述語「バラバラに」は義務的に対格の「花瓶」を修飾していると解釈されなければならない。主格の「太郎」を修飾すると解釈することはできない。下線部の結果述語が主格NPを修飾できないことは、(b)の容認度が落ちることから確認できる。もし、強引に(b)の下線部が主格を修飾するように解釈すれば「太郎が全ての花瓶を割った結果、太郎がクタクタになった」となるが、当然このような解釈は容認できない。

他方、自動詞構造については、近年しばしば「非対格仮説(unaccusativity hypothesis)」から自動詞が2種類に下位区分されるが、影山(1996)では、自動詞のうち主格NPが結果述語と結び付くのは「非対格動詞(unaccusative verb)」に限られると述べられている。大雑把に言うとも、非対格動詞というのは、次の(a)のように主格NPの非意図的ないし非意志的な行為や、(b)のように出来事の生起ないし消失を表すものをいう。

- (8)(a) 花子はクタクタに疲れた。
 (b) 鍋の水がカラカラに蒸発した。

(a)では「壊れる」という非意志的な行為の結果として主格の「花子」が「クタクタ」という状態になったのであって、(b)でも基本的に同様である。よって、確かに非対格動詞では結果述語が主格NPを修飾するという記述に問題はない。

これに対し、問題を含むのが非対格動詞と対立する「非能格動詞(nergative verb)」であり、次の(9)(a)のように主格NPが意図的ないし意志的に行う動作や、(b)のように生理的現象を表すものをいう。

- (9)(a) * 太郎がクタクタに歩いた。
 (b) * 次郎がカラカラに咳いた。

(9)(a)の「歩く」は意図的な行為を表すので非能格動詞であり、その行為の結果として「クタクタ」という状態に至ったと解釈する限り非文と判断され、(b)でも基本的に同様である。したがって、非能格動詞文では結果述語は主格NPを修飾し得ないと記述されている。

このように、結果述語が非対格動詞文の主格と他動詞文の対格に限られることについて、影山(1996)は、両者の共通性を「項構造」に還元し、項構造において非対格動詞の主格主語と他動詞の対格目的語が同一の地位に位置づけられると論じている。しかしながら、結果述語をとるかどうかにとって本質的に重要なのは「項構造」上の位置や主格NPの[±意志]ではなく、第一に語彙的アスペクトとして「変化(BECOME)」を含むかどうかという点であって、非能格動詞が結果述語をとれないように見えるのは非能格動詞の多くが「状態の変化」を含まないことの副次的な結果にすぎない。実際、非能格動詞でも「変化(BECOME)」を含むものの中には、次のように「ニ格」名詞句を結果述語としてとり得るものが認められるからである。

- (10)(a) 全員が縦一列に並んだ。
 (b) 太郎が腹ばいに寝ていた。

(10)(a)では「並ぶ」という意図的な行為の結果として「縦一列」という状態が出来るのであって、逆に「並ぶ」ことがなければ「縦一列」になることもないから、非能格自動詞文でも結果述語が主格を修飾していることになる。また、(b)の「寝る」も意図的な非能格動詞であるが、下線部が結果補語として解釈されるのは、語彙的アスペクトとして「変化」を含むためにほかならない。

逆に、非対格動詞であっても、次の例が示すように「変化(BECOME)」を含まなければ、結果述語として解釈することはできない。

- (11)(a) 車がピカピカに光っている。
 (b) 車が真逆さまに落下した。

(11)は(a)でも(b)でも、主格NPの「自動車」は完全に[一意]であるから自動詞「光る」や「落下する」は非対格動詞であるが、下線部を結果補語として解釈することはできず、通常「状態描写的(depictive)」な[様態]として解釈される。このとき、(b)の下線部を結果補語として解釈できないのは語彙的なアスペクトとして「変化(BECOME)」を含まないためであって、本質的に主格NPの[土意志]には束縛されないのである。

以上、本節では「に」の修飾関係について、自動詞の主格NPと他動詞の対格NPに限られることと、結果述語も同様の振る舞いを示すことを確認した。次節以下では、他の用法も空間次元と結果述語の間に収まるものとの見直しをもって議論する。

2. 空間領域の多様性

第2節では、空間的な「ニ格」について「ヲ格」や「テ格」と対比させながら検討する。^[5]

さて、第1節の(1)で挙げた諸用法のうち、純粋に空間次元で用いられる意味には、静的な「存在点」を除いて次のようなものがある。

- (12)(a) 針金を内側に曲げる。 [方向]
 (b) 壁にボールを投げる。 [到着点]
 (c) 壁にペンキを塗る。 [密着点]
 (d) 調味料をスープに入れる。 [収斂先]

これらは見かけ上、何ら意味的な統一性がないようにも思われるが、変化主体(自動詞の主格NPまたは他動詞の対格NP)が——程度差をもって——与格NPに近づいていくという点で1本の軸の上に並べることが可能である。この分析に援用すべき概念として、山梨(1994a:106-108)が空間の「ニ格」について提案した(近接性)(到着性)(密着性)(収斂性)という4つの認知的制約がある。この

4つは独立した要因というより、いわば(一体化)という1つの軸の上で程度差をもった連続体として考える方が実態にあってるように思われる。ここでいう(一体化)とは4つの制約を統括した上位概念であり、4つの制約は次のような階層をなしながら(一体化)の程度差を表す基準として再規定される：

《近接性》→《到着性》→《密着性》→《収斂性》

つまり、最も左の(近接性)が(一体化)の度合いも最も弱く、右に行くほど(一体化)の度合いが強くなるというものである。これを援用すると、上の(12)の例で、(a)における「針金」と「内側」の関係は、せいぜい「内側」に近づいているということではしかないわけだから最も(一体化)が弱く、(近接性)を満たす程度のもので位置づけられる。(b)では「ボール」が「壁」に到着するというのがデフォルト的解釈であるから(到着性)のところに位置づけられ、(c)では「ペンキ」が「壁」に到着した上に互いに切り離し得ない状態になるという点で(密着性)に位置づけられる。最後の(d)では「調味料」と「スープ」が混ざり合っただけで明瞭な区分がなくなるので、最も(一体化)の度合いが大きく(収斂性)を満たしているということができる。

このように記述して来ると、では、与格NPは自動詞構造の主格NPや他動詞構造の対格NPとの関係において、どこまで(一体化)するのかという問いが当然予想される。この問いに対しては“動詞の意味内容の範囲で、デフォルト的には可能な限り一体化する”というのが本稿での回答である。というのも、(12)(a)において「針金」と「内側」の関係(近接性)というタームで記述したのは、動詞「曲げる」によって表される事象が(近接性)以上の一体化を可能にしないためにほかならない。同様に、(b)における「ボール」と「壁」の関係および(c)における「ペンキ」と「壁」の関係を、各々(到着性)および(密着性)というタームで記述しているのも、それぞれの動詞「投げる」および「塗る」の表す事象において可能な限り(一体化)を進めた解釈である。ここでいう(一体化)の度合いに関する判断は、当然、言語使用者の解釈を含んだものであり、(d)において「調味料」と「スープ」が(収斂性)を満たすのは、単に動詞「入れる」の意味だけから導かれるのではなく、料理というコンテキストの中で「調味料」と「スープ」の関係に対する経験的な知識を踏まえて判断されることに留意されたい。

ただし、明確に付け加えておかなければならないのは、決して「ニ格」が4種類に分けられるのではなく、むしろ(一体化)という性質には程度差があって、4つの基準を援用することで個々の意味役割が一元的に整理できるという点であり、この意味で4つの制約が便宜上の目安に過ぎないことを確認しておきたい。

ところで、上述の分析は、従来の記述に訂正すべき点を指摘することにも貢献する。「ニ格」標示の制約として良く知られているのは、田窪(1984: 92)が述べているように、動詞「来る」や「行く」などを述語とする移動表現において[着点]が非場所名詞のとき[着点]を「ニ格」で標示できないというものであり、次のように例示される。

- (13)(a) 花子が公園に来た。
 (b) ?? 花子が太郎に来た。
 (c) 花子が太郎のところに来た。

この例のように「来る」を述語とする動詞句内において、(a)が示すように[着点]が場所としての「公園」であれば「ニ格」で標示されるのが通常であるが、(b)のように[着点]が非場所名詞になると単純な「ニ格」形で標示することはできず、(c)のように「のところ」などを付与することによって場所性を形式的に保証する必要があるとされる。しかしながら、(b)の容認度が落ちることを単に「太郎」という名詞の場所性の問題に帰着させるのは適切でない。(b)が容認不可能になるのは「来る」という動詞が求める(到着性)を「花子」と「太郎」では満たし得ないという単純な理由によると考えればよいからである。実際、次の例が示すように、移動主体と着点NPが(到着性)を満たせば、[着点]NPが非場所名詞であっても「ニ格」で標示することができる。

- (14)(a) 小さな虫がまた顔に来た。
 (b) 貴方にも手紙が行くはずです。

つまり、移動主体が「小さな虫」や「手紙」のように、相対的にサイズが小さく、人間の身体への(到着性)を満たすものであれば、十分「ニ格」で標示できるのであって、単に「顔」や「貴方」といった名詞の場所性の問題ではないことが確認されると思われる。^[6]

いずれにせよ(一体化)という見方を認めると、空間次元において移動主体(自動詞構造の主格NPまたは他動詞構造の対格NP)は「ニ格」に対し潜在的な方向性を持つことになるが、このことは、次のように動詞「向かう」と「向く」のペアにおいて補語が「ヲ格」で標示されるか「ニ格」で標示されるかの予測にも貢献する。

- (15)(a) 新幹線で福岡に向かう。
 (b) *新幹線で福岡を向かう。
 (16)(a) *整列して正面に向く。
 (b) 整列して正面を向く。

上の(15)のように、動詞が移動を含む「向かう」のとき

「福岡」の格標示が「ニ格」でなければならないのは「向かう」ことが移動行為であって、目標への方向性を含んだ(近接性)を満たすためであり、(16)のように動詞が「向く」のとき「正面」の格標示が「ヲ格」でなければならないのは「向く」ことが移動を含まず「正面」に近づくことがないためと説明できる。^[7]

さて、ここで考慮に加えなければならないのが[存在点]であり、次の例からも分かるように、[存在点]は、見かけ上、位置変化(移動)を伴わない。

- (17)(a) 玄関に一人の紳士が立っていた。
 (b) 玄関で一人の紳士が立っていた。

このようなペアについては、森田(1989:760-761)が言うように、(17)(a)の「ニ格」が主格の「紳士」を「玄関」に位置づけるのに対して、(b)の「デ格」は「紳士」が「玄関」に所在することを前提に「立っている」という行為の方に重きが置かれるとの分析が妥当であろうと思われる。というのも、場所を「デ格」で標示したときは、主格NPが場所NPに所在することが常に前提とされるからである。実際「玄関」を「デ格」で標示すると、例えば「紳士が玄関で寝ている / 話し始めた」のように、動詞の語彙的意味にかかわらず「紳士」が「玄関」にいるという関係は完全に保証される。これと対照的に、空間の「ニ格」では始めから所在することを前提とせず、事象の結果的側面において初めて主格NPや対格NPを“位置づける”という関係を伴う。^[8]

[存在点]が“位置づける”という関係を伴うことは、次のようなペアにも反映される。

- (18)(a) 敷地内に小型シェルターを作った。
 (b) 敷地内で小型シェルターを作った。

(18)(a)のように「敷地内」を「ニ格」で標示したとき「小型シェルター」は「作る」という行為の最終局面において「敷地内」に位置づけられると解釈されるが、(b)のように「敷地内」を「デ格」で標示したときは「小型シェルター」の製作が「敷地内」で行われることを示すのみであって、そのまま「敷地内」に位置づけられるとの含意はない。

さらに、[存在点]が位置づけを伴うという本稿の分析は、これまで説明が困難だった現象にも一貫した原理で説明を与えることが可能になる。問題になる現象とは、存在文において主格NPが(モノ)のときと(コト)のときとで場所NPの格標示が異なるというものである。具体的には、存在文における主格NPが(モノ)のときは、次の(19)(a)のように[場所]を「ニ格」で標示しなければならないが、(b)のように「デ格」で標示することはできない。

- (19)(a) 学校にL L教室がある。
 (b) *学校でL L教室がある。
- (20)(a) *学校に防災訓練がある。
 (b) 学校で防災訓練がある。

- (22)(a) 花子を食事に誘った。 [目的]
 (b) 上司に事情を話す。 [伝達先]
 (c) 会社が優秀な人材に富む。 [要素]
 (d) 液体が気体に変わる。 [結果]

逆に、主格NPが{コト}のときは(20)(a)のように場所の「学校」を「ニ格」で標示できず、(b)のように「デ格」で標示しなければならない。この現象は、Makino(1968), 新屋(1994), 中右(1995), 山本(1995), Ueno(1995)でも触れられているが、いずれも“なぜモノの存在には「ニ格」が要求され、コトの存在には「デ格」が要求されるのか”という問題に意味論的な回答を与えてはいない。

この問題を本稿の理論から説明すれば、主格NPが{モノ}のとき場所が「ニ格」でなければならないのは主格NPが空間の「ニ格」に位置づけられると解釈されるためであり、主格が{コト}のとき場所が「ニ格」で標示できないのは{コト}を空間的に位置づけることができないためと理解される。この分析の傍証として、空間的に位置づけることができる状況であれば、次の例が示すように、主格NPが「裁判」のような非モノ名詞であっても場所NPを「ニ格」で標示することができる。

- (21)(a) 今日、東京地裁で注目の裁判がある。
 (b) かつて日本にも陪審員制の裁判があった。

通常「裁判」は{コト}であるから場所は(a)のように「デ格」で標示されることが期待されるが、(b)のように「ニ格」で標示することも可能なのは、制度としての「裁判」であれば解釈上「日本」に位置づけることが可能であるためと説明できる。

以上、本節では、空間の「ニ格」が(一体化)という一つの軸で一元的に把握されるとともに、[存在点]も移動主体が位置づけられるところとして特徴づけられることを確認した。

3. 非空間領域の多様性

第3節では「ニ格」の用法のうち非空間領域の用法を取り上げる。

前節で述べたように、空間においては移動NPが着点NPとの間で(近接性)→(到着性)→(密着性)→(収斂性)という程度差をもって(一体化)する特質を見たが、非空間次元においても同様の一元化が可能であると思われる。具体的には、次の(22)(a)~(d)が示すように、自動詞の主格または他動詞の対格と与格NPとの間に(一体化)の関係と、その程度差が認められる。

(a)では比喩的に「花子」を「食事」に近づけているという点で(近接性)までしか満たさないが、(b)では「事情」が「上司」に到達するという点で(到着性)を満たし、(c)では「会社」と「人材」は不可分の関係にあるという点で(密着性)にまで達しているといつてよい。また、(d)においては「液体」と「気体」が同一の対象であるという点で(収斂性)を満たしているといつてよい。

もう少し具体的に見ていくと、4つのうち(一体化)の度合いが最も弱い(近接性)は、次のような用法の集合として捉えられる。

- (23)(a) 太郎が父親に似て来た。
 (c) 花子が先輩に懂れる。
 (b) 信用回復に力を注ぐ。

(23)(a)~(c)は、従来それぞれ[基準][志向先][目的]のように異なる意味役割を与えられていたが、(a)および(b)のような自動詞構造の主格NPであれ、(c)のような他動詞構造の対格NPであれ、与格NPに抽象的な接近が認められるという点で本質的に変わらない。すなわち、(23)(a)では容姿や仕草において主格の「太郎」が与格の「父親」に近づいているのであって、(b)でも主格NP「花子」の気持ちが「先輩」に近づいて行っていると比喩的に解釈される。また、(c)では対格の「力」が「信用回復」に向けられており、この点で(近接性)という観点から一元化することが可能である。もはや、(23)(a)~(c)に異なる意味役割を与えることは皮相的な問題に過ぎない。

第2の(到着性)を満たす例に次のようなものがある。

- (24)(a) 会員に日程を伝えた / 連絡した。
 (b) 恩師に講演を頼んだ / 依頼した。

ここでは物理的には何ら位置変化(移動)を含んではいないものの、与格NPは比喩的に移動主体の受け手として解釈される。これらの例が(到着性)を満たすといえるのは、デフォルト的に伝達内容ないし意向が各々「全員」や「恩師」に到達していると理解されるからである。^[9]

3番目に(一体化)の度合いが大きい(密着性)は、次のように例示される。

- (25)(a) 全員が自信に満ちあふれる。
 (b) 花子が感冒にかかっている。

ここで、与格を(密着性)という用語で特徴づけられることは、(a)および(b)における主格NPと与格NPの関係から自明であろうと思われる。

この(密着性)に関して興味深い現象は、受動化に伴って予想外の交替を引き起こす点である。具体的には、次のように動詞が「恵む」の場合、(26)(a)の能動文を受動化するとき与格の「太郎」を主格に昇格させるだけでは(b)のように非文が生じてしまう。

- (26)(a) []が太郎に才能を恵んだ。
 (b) *太郎が才能を恵まれた。
 (c) 太郎が才能に恵まれた。

(b)の非文法性を回避するため、(c)のように対格の「才能」が与格に変更されるが、この変更は通常受動化には観察されない希有な現象であり、本稿でいう(密着性)とう概念を用いなければ説明できないと思われる。すなわち、上で見たように(密着性)の関係で結ぶことができるのは<他動詞構文の対格と与格>または<自動詞構文の主格と与格>という2つのパターンしかなく、他動詞構文の主格と対格の間には認められない。(b)が非文になるのは、受動化によって「太郎」が主格に昇格したことで「太郎」と「才能」の格標示が各々「ガ格」と「ヲ格」になり、自動詞構造の中で両者を(密着性)の関係で結ぶ形態統語論的な保証が失われたためということになる。かくて、(c)において「才能」の格標示が「ニ格」に変わらなければならないのは、自動詞構造の中で主格NP「太郎」との間で(密着性)の関係を適切に結ぶための措置と説明することができるのである。

次に、4つのうち(一体化)の度合いが最も大きいのは(収斂性)であるが、次の例が示すように、非空間次元においては主格NPまたは対格NPが与格NPと実質的に同じ対象を指示するような関係が成立する。

- (27)(a) 隊員達が制服姿になった / 着替えた。
 (b) *隊員達が制服姿に現れた / 整列した。

(27)(a)における「ニ格」の「制服姿」が「ガ格」の「隊員達」と(収斂性)を満たすというのは、両者が同一の対象を異なる側面からとらえたものであり、換言すれば「隊員達=制服姿」の関係が成り立つという点で両者が指示対象において一つに収斂するとみなされるからである。このとき「隊員達=制服姿」の関係は動詞「なった」や「着替えた」の表す事象を経て初めて成立することに注意されたい。というのも、(b)に挙げた「現れる」や「整列する」のように「隊員達」と「制服姿」の関係に影響を及ぼさない動詞とは共起し得ないからである。このように、補語の「制服姿」を「ニ格」で標示したときは、いわば<-制服姿>か

ら<+制服姿>への変化が起こっており、この点で、次のペアが示すように「デ格」と弁別的に機能する。

- (28)(a) * 隊員達が制服姿でなった / 着替えた。
 (b) 隊員達が制服姿で現れた / 整列した。

このペアのように、補語「制服姿」を「デ格」で標示したとき、(a)が非文になるのは「隊員達=制服姿」の関係が動詞「なる」や「着替える」の表す事象を通して変化を被らないからであり、逆に、(b)の容認度に問題ないことから、事象を通して「隊員達=制服姿」の関係に変化が生じないことが確認される。この点で(収斂性)を充足するのに事象を通じた変化を経なければならない与格と明確に差別化されるのである。

さらに「ニ格」の(収斂性)については、次の例が示すように、本来的には同定関係を成立させるような意味内容でない動詞が述語であっても、与格と対格との間で(収斂性)を充足することがある。

- (29)(a) 太郎が土産に香水を買った。
 (b) *太郎が土産で香水を買った。

ここで、述語動詞「買う」は同定関係を成立させるような意味内容ではないが、(a)のように、下線部の「土産」を「ニ格」で標示すると対格NP「香水」の間で「香水≠土産」の関係から「香水=土産」の関係が成立する。これに対し、(b)のように「土産」を「デ格」で標示すると「買う」という事象の前から「香水=土産」の関係が成立していることになり、この解釈が経験的に不自然であるため非文と判断される。

同様に、次のようなペアの差異についても明確に説明を与えることができる。

- (30)(a) IOCは開催地をシドニーに決定した。
 (b) IOCは開催地をシドニーで決定した。

この例において、(a)では下線部の「シドニー」が「ニ格」で標示されており、最大限(一体化)を進めると、対格の「開催地」が与格の「シドニー」と(収斂性)を満たし最終的に「開催地=シドニー」の関係が成立する。これに対して、(b)では下線部の「シドニー」が「デ格」で標示されているので事象を通じて対格の「開催地」と具格の「シドニー」が何ら(一体化)することなく、具格の「シドニー」は主格NPの所在する空間的領域を示すにすぎない。^[10]

最後に、次の例のような知覚文や能力文における「ニ格」NPについて、国立国語研究所(1997:119-120)では[経験者]と呼んでいるが、広い意味での[存在点]と考えるというのが本稿の立場である。

- (31)(a) 君に私の声が聞こえますか。
 (b) 太郎に後任が務まるとは思えない。

これらの「ニ格」を[存在点]と分析するのは「知覚文」や「能力文」が広い意味で存在文として範疇化されるからであるが、その論拠については菅井(1993)を参照されたい。

かくして、山梨(1994a)のいう(到着性)(密着性)(収斂性)(近接性)を援用することで、第1節で挙げた(1)と(2)を次のように整理することができる。

スケール	空間次元	非空間次元
(近接性)	[方向]	[目的]
↓	↓	↓
(到着性)	[到着点]	[伝達先]
↓	↓	↓
(密着性)	[密着点]	[要素]
↓	[存在点]	[経験者]
↓	↓	↓
(収斂性)	[収斂先]	[結果]

ここで、[存在点]を[密着点]と同じところに置いたのは、移動という側面が前景化されないものの結果的な側面において[存在点]も[密着点]と同じように与格NPに位置づけられるという特徴が認められるからである。また、[経験者]というのは知覚文や能力文における「ニ格」であるが、非空間次元で(密着性)を満たす用法として位置づけたのは、前述のように広い意味で[存在点]と同質のもののみなされるからである。

以上、本節では、非空間次元においても空間次元と同様に(収斂性)(密着性)(到達性)(近接性)を分類の基準とすることで「ニ格」の大部分を単一の軸の上に整理できることを確認した。

4. 与格による起点標示

最後の第4節では、第1節の(3)で挙げた諸用法のうち[起点]と[原因]について考察する。[起点]と[原因]の「ニ格」は対義関係にある「カラ格」と交替する点で特異といえる。

まず、広義の[起点]標示について、与格の奪格の交替は次のようなペアで例示される。

- (32)(a) 花子が先輩に携帯電話を借りた。
 (b) 花子が先輩から携帯電話を借りた。

「ニ格」と「カラ格」が対義的な概念として用いられること

を考えると、両者が交替するのは奇妙なようにも思われるが、この現象に関しては、良く知られているように、すでに池上(1981:121-170)や Ikegami(1987)によって、場所理論の立場から《起点<着点》の非対称性として論じられ、[起点]の与格は[着点]が一方向的に転用されたものと分析されている。^[11] この分析を援用し、主格NPからのエネルギーと移動主体を黒丸・で、着点と起点を細円で表せば、格標示による移動主体と起点ないし着点の関係は次のように図示できる。

- (33)(a) [着点]の与格 $\longrightarrow \odot$
 (b) [起点]の与格 $\longleftarrow \odot$
 (c) [起点]の奪格 $\bullet \longleftarrow \bigcirc$

いま、右向きの矢印を順方向、左向きを逆方向と呼ぶと、[着点]の与格は、主格NPから着点NPへの順方向的なエネルギー伝達が(到達性)を満たしていることを表し、[起点]の与格は、順方向的な着点NPへの(到達性)を前提に、その[着点]を[起点]として逆方向に汎用したものであるというのが本稿の分析である。また、[起点]の奪格は、移動主体・が起点NP○から離れている関係を示し、順方向的な動きは何ら前提としない点で、与格標示と明確に区別される。重要なのは、[起点]の与格が[着点]の与格を前提にしているということであり、起点NPが「ニ格」で標示されるときは、起点NPに対する順方向的な働きかけが含まれていることを確認しておきたい。ここでいう順方向的な「働きかけ」というのは、主格NPから起点NP(=着点NP)へのエネルギー伝達であるから、具体的には<申し込む>ないしは<求める>という側面に相当する。^[12] この順方向的な側面を暫定的に“働きかけの局面”と呼び、逆方向的な移動主体(対格NP)の動き“受け取りの局面”と呼ぶと、[起点]の格標示に関する基本原則は次のように整理される：

- (34) 起点の「ニ格」標示は起点NPへの順方向的な“働きかけの局面”が前提とされ“働きかけの局面”と“受け取りの局面”を併せた全体をプロフィールするのに対し、起点の「カラ格」標示は逆方向的な“受け取りの局面”のみを前景化し、移動主体が起点NPから離れている関係をプロフィールする。

この原理を上(32)に適用すると、(32)(a)のように「先輩」を「ニ格」で標示したときは、主格NP「花子」から「先輩」に「借りる」ことを求めたことが前提となっているのに対し、(b)のように「カラ格」で標示したときは「花子」が「先輩」に「借りる」ことを求めるという働きかけの

側面が背景化され、結果的に「先輩」から「携帯電話」が一時的に移動していることが前景化されているということになる。

この交替現象に関連して問題になるのは、次のペアが示すように「ニ格」での標示に一定の制約が課せられるというものである。

- (35)(a) 太郎が先生に本を借りた。
 (b) 太郎が先生から本を借りた。

- (36)(a) ?? 太郎が図書館に本を借りた。
 (b) 太郎が図書館から本を借りた。

このような2組のペアを根拠に、従来の客観主義的な分析は、下線部が[動作者]の意味役割を担うかどうかにかかわらず「ニ格」標示の成否を帰着させてきた。実際、柴谷(1978:297-304)や杉本(1986:365-366)および Kabata and Rice (1997)によれば、問題のNPが与格で標示できるのは[起点]であると同時に[動作者]としても解釈可能なときであり、[起点]としてしか解釈できないときは奪格での標示のみが許されるという。この“動作者説”に従うと、(35)の例で「先生」が「ニ格」で標示できるのは「先生」が「本」の[起点]であると同時に[動作者]でもあるからであり、(36)の例で「図書館」が「ニ格」での標示が許されないのは「図書館」が[動作者]になれず[起点]としてしか解釈できないためということになる。しかしながら、従来の“動作者説”は妥当ではない。なぜなら、次の例が示すように、[起点]相当句を動作者として解釈することが同じように困難な名詞句でも「ニ格」での標示が許されるケースが観察されるからである。

- (37)(a) 太郎が銀行に資金を借りた。
 (b) 太郎が銀行から資金を借りた。

下線部の「銀行」は、[動作者]として解釈されづらいという点で上の例の「図書館」と変わりなく、[動作者]として解釈できるかどうかに関して両者を区別する理由はない。それにもかかわらず、(a)のように「銀行」が「ニ格」で標示され得るということは、下線部のNPが動作者としての解釈を持ち得るかどうかを「ニ格」標示の条件と考えることの誤りを示していると言える。上の(34)に挙げた説明原理に従えば、下線部の格標示に対する説明は次の通りである。まず、(36)のペアにおいて下線部の「図書館」が「ニ格」で標示できないのは「図書館」が図書の閲覧・保管・貸し出しを役割とした公共機関であって、あえて「図書館」に“働きかけ”をする必要がないためであり、本理論の用語で言えば「図書館」への“働きかけ”をプロファイルすることが不自然であるためと説明される。同

時に、(b)のように「カラ格」でなければならない理由も明白であり、そもそも「図書館」の「本」を「借りる」というとき「本」が「図書館」から離れ外部に持ち出されるという経験的事実に基づくものである。実際「図書館」の外部に「本」を持ち出さないとき「借りる」とは言わないであろう。他方、(37)のペアにおいて、(a)のように「銀行」が「ニ格」で標示され得るのは、経験的知識として「銀行」が民間の企業であって、融資を希望する側からの“働きかけ”を前景化できるためであり、(b)のように「カラ格」での標示も可能なのは“働きかけの局面”を背景化して「資金」が「銀行」から離れているものと解釈することも可能であるためということになる。

もう1つ、本稿の分析の妥当性を積極的に支持する例として“動作者説”は、次のように、[起点]相当句が動作者として解釈できるときでさえ「ニ格」でのみ標示され「カラ格」で標示できないケースを説明できない。

- (38)(a) 太郎が大家さんに部屋を借りた。
 (b) ?? 太郎が大家さんから部屋を借りた。

従来の分析では、実は(38)(b)が容認不可能になる理由を積極的に説明できなかった。本稿での分析に基づく、起点NPが「ニ格」で標示されるのは経験的に「部屋を借りる」というとき「大家さん」への働きかけが前提になるからであり、逆に、起点NPを「カラ格」で標示できないのは、仮に“働きかけ”を前景化しない場合でも「借りる」という事象によって「部屋」が「大家さん」から離れるとの解釈が不自然であるためと説明される。以上の点に関して、少なくとも、あらかじめ[起点]か[起点+動作者]かが決まってい、前者であれば奪格を付し後者であれば与格を付すという客観主義的な分析は厳しく否定されるべきである。

さらに、動詞「借りる」との関連で、動詞「もらう」についても同様の原理で説明できることを確認しておこう。次の例が示すように、動詞「もらう」のケースも、起点の格標示において「ニ格」と「カラ格」で交替が観察される。

- (39)(a) 先生に油絵をもらった。
 (b) 先生から油絵をもらった。

このケースでも、上の「借りる」と同様に“働きかけの局面”が背景化されると、次の(40)(a)のように「ニ格」での標示ができなくなり、(b)のように「カラ格」でのみ標示されることになる。

- (40)(a) ?? 先生のところに油絵をもらった。
 (b) 先生のところから油絵をもらった。

- (41)(a) ? 警察に感謝状をもらった。
 (b) 警察から感謝状をもらった。

これらのペアで「ニ格」での標示が許されないのは、それぞれの(a)における「先生のところ」や「警察」が働きかけの対象として不適切だからにほかならない。^[13]

最後に、[原因]について簡単に触れておきたい。[原因]の「ニ格」も[起点]のケースと同じように「カラ格」と交替するが、[原因]NPは自動詞構造における主格NPとの修飾関係に帰着される。具体的に、[原因]NPが「ニ格」と「カラ格」で交替する現象として、次のような例が挙げられる。

- (42)(a) 余りの暑さに多くの女性が倒れた。
 (b) 余りの暑さから多くの女性が倒れた。

もちろん、両者には知的意味において明確な差異があり、山梨(1994b:109-110)によれば、(a)のような[原因]の「ニ格」には[着点]と同様の(収斂性)が働き、(b)のような「カラ格」は主格NPに対して間接的に作用することが含意される。このことは、次のようなペアに反映する。

- (43)(a) ?? 経済政策の失敗に内閣が倒れた。
 (b) 経済政策の失敗から内閣が倒れた。

- (44)(a) 次郎が弾丸に倒れた。
 (b) ?? 次郎が弾丸から倒れた。

上の(43)のように、下線部の「経済政策の失敗」は間接的な原因であって主格NP「内閣」と(密着性)も(収斂性)も満たさないで「ニ格」で標示することはできない。逆に、(44)のように、下線部の「弾丸」が主格NP「次郎」の体内に影響を与えるような(収斂性)が求められるようなケースでは「ニ格」で標示しなければならない。^[14]

以上、本節では奪格と交替する与格について考察し、[着点]の特質が継承される点で奪格と弁別的に差別化されることを確認した。

5. 結語

本稿は、現代日本語の「ニ格」を包括的に分析し、意味的な観点から弁別的に特徴づけるための予備的議論を行った。本文で検討した「ニ格」の特性は次のように要約される：

- [i] 機能的な修飾関係から見ると「ニ格」が修飾するのは自動詞の主格NPか他動詞の対格NPに限られる。このとき、非対格動詞と非能格動詞の

差異は本質的に関与しない。

- [ii] 「ニ格」は、空間次元であれ非空間次元であれ自動詞の主格または他動詞の対格が与格NPに(一体化)という軸において一元化され、同時に(一体化)の程度差において個別の意味役割が分化する。

- [iii] 「ニ格」による[起点]は[着点]から汎用されたものであるから、[着点]の基本的含意を継承し「ニ格」へのエネルギー伝達を前提とする点で、移動主体との乖離を前景化する奪格と弁別的に区別される。

以上により「ニ格」の輪郭と全体の構成が意味的に把握されたと思われるが、関連現象を精巧に分析することによって、フィードバック的に本稿の記述に補正する必要が生じることもあるかもしれない。その可能性を含めて、本稿の記述を理論的に体系化し説明を与える作業は、稿を改めて進めることとしたい。

注

- * 本稿の執筆にあたり、草稿の段階で聖心女子大学の山田進先生から多くの生産的な助言を頂戴した。特に記して深謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿の不備や誤りはすべて筆者一人の責任である。
- [1] 例えば、国立国語研究所(1997:119-165)では延べ27の深層格を認めており、林(1992)や益岡・田窪(1987:4-5)では、それぞれ15と11の用法を挙げている。
- [2] また、本稿では考察対象を節の直接構成素としての「ニ格」に限定するので、例えば「1日に3回」のように全体で1つの副詞句ないし名詞句を構成する「ニ格」も考察対象から外しておく。
- [3] ここでいう修飾関係とは Langacker(1987,1991)のいう「自律/依存(autonomy/dependency)」の関係に相当するが、用語法を簡明にしておくという目的で、本稿では「修飾関係」という言い方を用いる。
- [4] Vandeloise(1994)が英語の前置詞 in に関して論証したように、場所表現句で修飾するということは空間的に包含するという単純な問題ではなく、機能的に制約するという関係が日本語の「に」にもあてはまるということであろう。
- [5] 先行研究には「ニ格」を「デ格」と対照させて分析したものが多く、主なものに、新井(1972)、久野(1973)、Jacobsen(1977)、山田(1981)、赤羽根(1987)がある。
- [6] 要するに、NPが場所として認められるかは究極

的に言語話者の解釈に帰着されるというのが本稿の立場である。荒川(1992:72)でも、移動主体によって場所性の解釈が異なる可能性に触れているが、一方で「お皿に蠅がいる」のような表現を容認不可能と判断しており、解釈の能力を過小に評価しているように思われる。

- [7] 動詞が「向く」の場合でも「西に向く」のように与格の標示が許されるケースもあるが、与格が標示できるのは「西」のようにNPが本来的に方向の概念を含んだものであり、この点で極めて例外的な類推(analogy)と考えた方がいいであろう。
- [8] ちなみに、柴谷(1978:282-285)は、場所NPの格標示における「に」と「で」の使い分けについて、動詞が<動的動詞>のときには「に」で標示されるのに対し、<静的動詞>のときには「に」で標示されると述べているが、(17)の例によって明確に反証される。
- [9] 第1節の(1)では挙げなかったが、使役の被動作者も“影響が到着するところ”という意味で非空間次元の(到着性)を満たすものとして特徴づけることができる。
- [10] もちろん「開催地はシドニーで決まりだ!」のような表現もあるが、主観的な判断であれ既に「開催地=シドニー」の関係が成立していることを前提に、その関係が「決まる」という次の段階に進むことを言っているのであって、決して意味的に「デ格」と「ニ格」が等しいわけではない。
- [11] 本稿では[着点]という用語を使って来なかったが、ここでは[着点]を第2節で触れた[方向][到着点][密着点][収斂先]のカバータームとして用いることとする。なお、本来[着点]を表す「ニ格」が[起点]を標示し得る点については、Kumashiro(1994)も参照されたい。
- [12] 本節で援用している「エネルギー伝達」という考え方は Talmy(1985)によるものである。また、以下で用いる「前景化(highlighting)」および「背景化(back-grounding)」については Cruse(1986:53)を参照されたい。
- [13] 動詞「もらう」に関しては「カラ格」での標示ができないケースは観察されない。このことは「もらう」という事象において移動主体が起点NPから離れたと解釈できないような関係が経験的に生じないためであろうと思われる。
- [14] 山梨(1994b)は[原因]の「ニ格」に(収斂性)を求めているが、本稿の枠組みでは(密着性)でも可能であるように思われる。なお、[原因]の「デ格」との関係については 菅井(1997:33-34)を参照されたい。

参考文献

- 赤羽根義章 1987 「格助詞『に』と『で』について——文法指導の視点から」『日本語学』第6巻・第5号(1987年5月号), pp.82-94.
- 新井栄蔵 1972 「場所を示す場合の格助詞『に』と『で』をめぐって」『日本語・日本文化』第3号, pp.43-57. 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 荒川清秀 1992 「日本語名詞のトコロ(空間)性——中国語との関連で——」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版, pp.71-94.
- 池上嘉彦 1981 『<する>と<なる>の言語学』大修館書店.
- 影山太郎 1996 『動詞意味論』くろしお出版.
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』大修館書店.
- 神尾昭雄 1980 「『に』と『で』——日本語における空間的位置の表現」『言語』第9巻・第9号(1980年9月号), pp.55-63.
- 国立国語研究所
1997 『日本語における表層格と深層格の対応関係(国立国語研究所報告113)』三省堂.
- 柴谷方良 1978 『日本語の分析』大修館書店.
- 城田 俊 1993 「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp.67-94.
- 杉本 武 1986 「格助詞」奥津敬一郎・田沼善子・杉本武(共著)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp.227-380.
- 菅井三実 1993 「構文スキーマ理論序説」『人文科学研究・第22号』名古屋大学大学院文学研究科, 人文科学研究編集委員会, pp.33-50.
- 1997 「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp.23-40.
- 田窪行則 1984 「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』第12号, pp.89-117. 大阪外国語大学.
- 竹沢幸一 1995 「『に』の二面性」『言語』第24巻・第11号(1995年11月号), pp.70-77.
- 中右 実 1995 「『に』と『で』の棲み分け——日英語の空間認識の型(1)」『英語青年』第140巻・第10号(1995年1月号), pp.20-22.
- 新屋映子 1994 「存在文における『場所ニ』と『場所デ』」

- 『津田塾大学紀要』No.26. pp.125-142.
- 益岡隆志・田窪行則
1987 『格助詞 (日本語文法セルフ・マスターシリーズ)』くろしお出版.
- 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 山田 進 1981 「機能語の意味の比較」国廣哲彌(編)『日英語比較講座[3]意味と語彙』大修館書店, pp.53-99.
- 山梨正明 1994a 「日常言語の認知格モデル[2]——格解釈のゆらぎ」『言語』第23巻・第2号(1994年2月号), pp.100-105.
- 1994b 「日常言語の認知格モデル[4]——認知的視点の投影と言語理解」『言語』第23巻・第4号(1994年4月号), pp.106-111.
- 山本和之 1995 「移動と所在: 日英語における『着在点』の語彙概念構造」『英語と英米文学』第30号, pp.117-135.
- 林 璋 1992 「助詞の意義と用法の体系——格助詞『に』を中心に——」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学——その提言と建設』三省堂, pp.516-530.
- Cruse, D.A. 1986 *Lexical Semantics* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge, U.K: Cambridge University Press.
- Ikegami, Y. 1987 “‘Source’ vs. ‘Goal’: a Case of Linguistic Dissymmetry,” In Dirven, René and Günter Radden (eds.) *Concepts of Case*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp.122-146.
- Jacobsen, W.M.
1977 “Locatives and case marking in Japanese,” *The CLS Book of Squibs Cumulative Index 1968-1977*. pp.52-53. Chicago Linguistic Society.
- Kabata, Kaori and Sally Rice
1997 “Japanese *ni* : the particulars of a somewhat contradictory particle,” In Verspoor, M.H., et al. (eds.), *Lexical and syntactical constructions and the construction of meaning* (Current Issues in Linguistic Theory, 150). Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins. Publishing Company, pp.102-127.
- Kumashiro, T.
1994 “How the Goal can be the Source: the semantics of the Japanese Dative Marker *Ni*,” *The twentieth LACUS forum 1993*. Lake Bluff : Linguistic Association of Canada and the United States, pp.401-417.
- Langacker, R.W.
1987 *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1 : Theoretical Prerequisites* : Stanford CA : Stanford University Press.
- 1991 *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2 : Descriptive Application* : Stanford CA : Stanford University Press.
- Makino, Seiichi
1968 “Japanese ‘Be,’” In Verhaar, J.W.M. (ed.) *The verb ‘be’ and its synonyms: philosophical and grammatical studies*, Part. 3 . (Foundations of Language / Supplementary Series, Vol.8), pp.1-19. D.Reidel Publishing Company : Dordrecht-Holland.
- Talmy, L. 1985 “Force dynamics in language and thought,” *CLS*, 21, Part 2, pp.293-337.
- Ueno, Seiji 1995 “Locative / Goal Phrases in Japanese and Conceptual Structure,” *KLS*, 15, pp.122-132. (Kansai Linguistic Society).
- Vandeloise, C.
1994 “Methodology and analyses of the preposition *in*,” *Cognitive Linguistics*, Vol.5(2), pp.157-184.

On the dative case (-*ni* case) in Japanese**Kazumi SUGAI**

The present paper is devoted to characterizing the dative case marker *-ni* in Japanese from the semantic point of view. The spatial semantic roles like [DIRECTION], [GOAL], and [LOCATION] are unified to the extent that they unite with either the nominative NP in the intransitive structure or the accusative NP in the transitive structure. In this vein, the non-spatial semantic roles like [ADDRESSEE], [RESULT], and [EXPERIENCE] are unified on the same basis in the metaphorical sense. When the dative is alternated with the ablative case to mark the [SOURCE]-phrase, the dative-marking of [SOURCE] is distinctive from the ablative-marking in that the former implies the nominative NP's approach to the dative NP, whereas the latter profiles the accusative NP away from the ablative NP.